P.126
教育

P.132
コラム：台湾入門書

P.134
言語

台湾教育学

映画で知る台湾教育の〈過去〉と〈現在〉

— 案内人 —
山﨑直也

若手演技派俳優の山田裕貴が主人公、乃木坂46の中心メンバーである齋藤飛鳥がヒロインを務めた2018年公開の映画『あの頃、君を追いかけた』は、2011年に台湾で大ヒットした青春恋愛映画のリメイク作品である。台湾のオリジナル版は、2000年代初頭にネット小説で人気を博し、その後、さまざまなメディアに活動の場を広げたギデンズ・コー（九把刀）が自伝的小説を脚本化し、監督としてメガホンを握ったものである。公開当時、筆者は台湾で在外研究中、「アラフォーの自分が観る映画でもあるまい」と、当初は関心がなかったが、日増しに加熱するブームに押されるようにして、普段あまり足を運ぶことのない映画館の客となった。年甲斐もなく甘酸っぱい気持ちにひたりながら、高校生から大人へと成長していく若者たちの恋愛と友情の物語を楽しんだが、「この展開は日本の恋愛映画ではありえない」と驚かされたのは、クー・チェンドン（柯震東）演じる男性主人公とミシェル・チェン（陳妍希）演じる女性主人公が大学卒業後、どちらも大学院に進学を目指し、大学院入試の準備に勤しむ姿が描かれたことだ。これは原作者のギデンズ・コーが実際に大学院を修了しているためだが（台湾の東海大学で社会学の修士号を取得）、日本の恋愛映画や恋愛ドラマで男女の主人公がそろって大学院に進む作品を筆者は寡聞にして知らない。

青春恋愛映画で大学院受験が描かれることが違和感を生じさせないほど、台湾の高等教育進学率は高い。台湾では、高校（台湾では高級中学という）卒業後に進学する高等教育機関に大学(university)、学院(college)、専科学校(junior college)があり、「大専院校」と総称される。日本の文部科学省に相当する教育部の統計によれば、2020年度現在、高等教育機関数は152校、内訳は大学が126校、学院が14校、専科学校が12校、専科学校は1校を除きすべて私立で医療・看護系が中心だ。高校卒業生が引き続き「大専院校」に進学する割合は8割を超える。

かつて「狭き門」であった大学が「日用品」となり、大学院進学がごくあたりまえのライフコースとなったのは、1990年代後半以降、学院、専科学校から大学への転換が進んだこととも関係している。日本をしのぐ少子化の中で、高等教育機関が増えているわけではなく、そこに占める大学の比率が高まっているのだ。誰でも望めば大学に進める現在の台湾だが、日本統治時代に源を発する「升学主義（進学主義）」は、いまなお大きな影響力を持っている。

日本の敗戦により中華民国政府に接収された台湾では、戦前とまったく異なる制度と内容で学校教育が行なわれることとなったが、「良い学校に進学することは良い人生を保証する」という社会通念が揺らぐことはなかった。本来、学校の「良さ」は、多義的であるべきだが、戦後の台湾では、「学力の高さ」「進学実績」という一点に矮小化された。教育内容を細かく定める「課程標準」（日本の「学習指導要領」に類するナショナル・カリキュラムの大綱）、国定教科書、高校大学の統一入試が強固な三位一体を形成する中で、「応試教育」、即ち、上級学校への入試対策を第一義とする教育が普遍化し、「創意（クリエイティビティ）」や「批判的思考」は影を潜めた。2017年に台湾で公開され、第55回金馬賞（台湾のアカデミー賞）で最優秀アニメーション映画賞を受賞、東京アニメアワードフェスティバル2018のコンペティション部門（長編アニメーション）でグランプリを獲得し、翌年には日本でも公開された『幸福路のチー』は、蔣介石が死去した1975年4月5日に生まれたチーというひとりの女性の成長を描く物語だ。同作の中で、厳格な教師にどこまでも従順な同級生たちが小学生のチーの目に餌を待つ鳥として映る場面があるが、これは台湾でつめ込み式教育を「填鴨式教育」、即ち、「アヒルの口に餌をむりやり押し込む教育」と言うことを意味している。勉強が苦手だったチーは祖母の暗示（？）でそれを克服し、台湾北部随一の名門女子高である台北市立第一女子高級中学（北一女）から国立台湾大学に進むことになるが、学校で「方言」を口にして先生に叱られる児童、教室を埋め尽くす中華民国政府の政治的標語と蔣介石の個人崇拝、名門高校に合格したチーに医学部進学をしきりにうながす家族・親戚と、権威主義体制下の台湾の教育を知るヒントが映画の随所にちりばめられている。

戦後台湾教育の基調であった「填鴨式」の「応試教育」は、権威主義的な一党支配を敷く政府にとって誠に都合のいいものであったに違いない。政府は各学校に「教官」を配置し、思想統制に努めたが、2021年に日本でも公開されたホラー映画『返校』は、「教官」による校門前での持ち物検査のシーンに始まり、1960年代の学校の息づまるような緊張感をよく表している。教師と生徒が行なう「読書会」が悲劇の引き金となる本作から、台湾にはかつて本を自由に読むことさえ許されなかった時代があり、政府批判の言動に対する暴力をともなう抑圧が学校という学びの場を侵食していたことがわかる。「読書会」が悲劇を招来するという描写は、上述の『幸福路のチー』にも見られる。

しかし、時代は確実に変化する。1987年の戒厳令解除を大きな契機とする民主化の波は教育分野にもおよび、逆に教育改革を求める声は、ほかの社会運動と同様、民主化・自由化の歯車を動かす力となった。現地公開の2年後、2014年に日本で公開された『GF*BF』は、1985年に高校生だった3人の男女が織りなす恋と友情を描く青春映画だが、主人公たちが身を投じる1990年の野百合学生運動と、主人公たちの双子の娘が2012年に服装の自由を求めて学校で展開する運動（実際の出来事がモチーフ）が一対として描かれている。台湾の学生運動と言えば、2014年のひまわり学生運動が日本でも大きな注目を集めたが、その中心人物たちに迫ったドキュメンタリー映画『私たちの青春、台湾』も、教育を考える示唆を含む作品である。

台湾の教育は1990年代から今日にいたるまで不断の改革の流れの中にあり、民主化以前と以後で大きな変化を遂げた。国定教科書、統一入試は過去のものとなり、「中華民国政府は中国全土を支配する唯一の合法政府である」という建前の存在によって教えられることのなかった台湾の歴史、地理、文化も学校で教えられるようになった。「升学主義」という伝統的価値観から完全に脱したとは言い難いが、つめ込み一辺倒から転換する兆しはあり、2000年代以降のナショナル・カリキュラム（「課程綱要」と名称を変更）では、「知識」よりも「能力」や「素養」が重視されている。

本稿では、日本語で観られる数作の台湾映画が描き出す学校のイメージから、戦後台湾教育の特徴の一端を紹介してきた。『返校』の冒頭シーンで持ち物検査に列をつくる生徒たちの服装と髪型が象徴するように、台湾の学校は戦前戦後の長期にわたり、この上なく画一的な空間であったが、自由と民主が日常化した現在の若者たちは、そのクリエイティビティで、画一的な学校というステレオタイプを塗り替えつつある。

最後に、映画ではなく動画で手軽に触れられる台湾の新しい学校文化をひとつ紹介したい。ここ数年、台湾では、高校を卒業する生徒がオリジナル楽曲でミュージックビデオを制作し、学校を超えてコンテストでその完成度を競い合うことが流行している。プロ顔負けの本格的な作品もあれば、手づくりの愛らしさに満ちた作品もあるが、生徒が自分たちの手でつくり上げる青春の記念碑は、生徒たちと彼ら彼女らが学ぶ学校の個性の結晶として、台湾の学校のリアルを知る絶好のショーケースと言える。卒業ソングコンテストからはプロの歌手も輩出されている。優れた作品はいくつもあるが、国立新竹女子高級中学の2018年の卒業ソング「回眸」(https://youtu.be/2_zxqFmE9hE)は、2022年5月現在、YouTubeで386万回と驚異的な再生数を記録している。

山﨑直也　やまざき・なおや
帝京大学外国語学部教授

台湾で初の総統直接選挙が行なわれた1996年の夏、海外青年向けのサマーキャンプに大学の推薦で参加するため、初めて海を渡り台湾の地を踏む。主催団体はChina Youth Corps。中国青年反共救国団という時代がかった正式名称の厳めしさに驚き、お膳立てされた講演（テーマは“中国”の伝統思想や国防）で年長者が語る紋切り型の建前の空疎さと、アテンド役を務める同世代の若者たちが語る本音の自由さとの「ズレ」に、「ここは一体どんな場所なのか？」と興味を持った。この台湾をめぐる最初の問いはその後の研究の出発点であり、建前と本音がもっともシビアに交錯する教育の面から台湾を観察し続けている。

主な著書

- 『戦後台湾教育とナショナル・アイデンティティ』東信堂、2009年
- 『東アジアの刑事司法、法教育、法意識——映画「それでもボクはやってない」海を渡る』共著、現代人文社、2019年

『台湾の若者を知りたい』

水野俊平

岩波ジュニア新書　2018年　￥946
ISBN：9784005008735

『韓国の若者を知りたい』（岩波ジュニア新書、2003年）の著者が台湾現地取材の成果をまとめた。研究者による教育の記述がマクロからミクロへ、即ち、歴史、制度の理解から始まって「現場」にいたるものとなりがちなのに対して、本書はミクロからマクロへ、「現場」の観察から台湾教育の全体像に迫っている。ふたつの手法にはそれぞれ長所と短所があるが、本書のアプローチは、随所に配された多数の写真の効果も相まって、台湾の学校の「実像」を見たという感覚を読者に与えることだろう。

本書の構成はシンプルで、第1章は台湾の地理的位置、気候、基礎知識、エスニック・グループと言語、中華民国と台湾の二重性といった基本知識、第2章から4章はそれぞれ小学校、高校、大学の学校生活の様子、第5章は「台湾人の本音」と題するアンケートの結果である。

小学校に関する記述はやや少なめで、授業前と授業後、つまり、登校時間、朝の掃除と「升旗朝会」（中華民国の「国旗」を掲揚し「国歌」を斉唱する儀式）、放課後の「安親班」（塾の機能を兼ねた学童保育サービス）と「課後班」（学校が行なう放課後学級）の説明はあるが、授業内容の記述は少ない。

中心となるのは、高校・大学に関する部分で、日本との相違点を意識しながら、かなり細かい記述がなされている。男女の生徒・学生へのインタビューもあり、学業だけでなく、アルバイトや恋愛事情、日本にはない兵役について、「生の声」に触れることができる。

第5章の台湾の人の日本観に関するアンケートは、19歳から67歳までの男女259名を対象とするもので、こちらも「生の声」として興味深いが、回答者の8割が女性、全員が日本語学習経験者であるという点を踏まえて読むことが必要だ。

留意が必要な部分もあるが、台湾の若者を知る最初の一歩となりうる1冊である。

『日本・台湾の高学歴女性』
極少子化と仕事・家族の比較

寺村絵里子・編著／萩原里紗、佐藤一磨、松浦 司、影山純二、孔 祥明・著

晃洋書房　2021年　￥4,070
ISBN：9784771034082

世界経済フォーラムが毎年発表するジェンダーギャップ指数は、経済・教育・保健・政治の各側面における男女格差を指標化したものである。2021年、日本は153カ国中120位と、同じ北東アジアの韓国（102位）、中国（107位）の後塵を拝した。他方、台湾は、調査対象国に含まれていないが、行政院性別平等処が同様の手法で計算し、38位という結果を導き出している（2020年29位）。蔡英文という女性の国家指導者を擁し、社会の各側面で女性の活躍が目立つ台湾と日本では、男女間格差の程度にもとより大きな相違があると想像されるが、体系的に収集されたデータの正確な分析は、われわれを粗雑な印象論から遠ざけ、生産的な議論の土台となる。

本書は、ともに急速な少子高齢化が進む日本と台湾のパネルデータの比較分析を通じて、女性の就業・家族の現状を多角的に考察するものである。経済学者の手によるものだが、教育を考えるうえでも示唆的だ。「男女間賃金格差の大きさと格差を構成する要因」（第2章）、「家族関係・家計収入が個人の幸福度に与える影響」（第3章）、「有配偶者の出産意欲」（第4章）、「子どもの性別に対する選好と幸福度の関係」（第5章）、「夫婦間の学歴組み合わせと世帯所得への影響」（第6章）と、各章とも興味深い問いが設定され、データにもとづいて腑に落ちる説明がなされている。日台のパネルデータの比較分析に加え、第7章では、日台の高学歴女性10名を対象とするインタビューの分析も行なわれており、女性たちの生の言葉が読みごたえを増している。

「女性と仕事」「女性と家族」という重要なテーマについて、台湾の「今」を客観的に把握することができる1冊であり、台湾女性史研究の優れた著作と併読することで、より深い理解に到達することができるだろう。

台湾では、1987年の戒厳令解除を契機として、教育改革の歯車が大きく動きはじめた。410教育改革デモ、第7次全国教育会議、行政院教育改革審議委員会（日本の臨時教育審議会を模した行政院＝内閣直属の諮問機関、台湾で唯一のノーベル賞学者である李遠哲が座長を務めた）の成立と、重要な出来事が続いた1994年をとくに「教育改革元年」と呼ぶこともあるが、今日にいたるまで不断の改革が進行している。その眼目は権威主義体制下の硬直した教育制度と偏向した教育内容の刷新にあるが、「多様化」は民主化・自由化時代の教育改革の最重要キーワードである。

現在、台湾の高等教育進学率は8割を超え、九州よりやや小さいと形容される島内に、じつに152校もの高等教育機関（大学126校、学院14校、専科学校12校、2020年度）がひしめいている。この大衆化の状況は一朝一夕にして成ったものではなく、1950年当時、台湾に大学は戦前の台北帝国大学の後身である国立台湾大学1校のみであった。高等教育機関数は長期にかけて段階的に増加したが、高等教育機関に占める大学の割合が急速に高まったのは、上述の教育改革の中でのことである。

本書は、1990年代以降の台湾で通常とは異なる理念や役割を有する教育の形式、即ち、職業教育、社会人向け教育、海外で提供される教育が高等教育システムの中に包摂され、高等教育の多様化をうながすとともに、高等教育の意味をどのように拡張してきたか、その過程と論理を明らかにしようとするものである。第1章で社会の変容と高等教育改革の動きを整理したうえで、空中大学（日本の放送大学を模した教育プログラム）、高等職業教育、社会人プログラム、海外学位プログラムといった「通常の」学士学位プログラムとは異なる例外的事例を詳細に考察し、これらの動きが台湾の高等教育、ひいては教育そのものの多様化をいかにうながしたかを検証している。

『台湾における高等教育多様化の論理』

廖 于晴

東信堂　2021年　￥3,520
ISBN：9784798916699

学歴社会化が進行する日本統治下の台湾の各地域によって展開された中等・高等教育機関の誘致運動を豊富な史料を用いて実証的に研究した1冊。対象となるのは、地方行政と教育の両面で大幅な制度的改変がなされた1920年代。前者においては五州二庁制の導入により限定的ながら地方の「自治」が進展し、後者においては第2次台湾教育令の制定により中等以上の学校で日本人と台湾人の共学が実現した時代である。

本書は、上述の五州二庁制の成立過程とこの新制度が「自治」意識の萌芽に与えた影響を第1章で検討したうえで、各章で台南州台南市の専門学校をめぐる運動、高雄州高雄街の形成過程、同州鳳山街・屏東両街における中等学校誘致運動、台南州嘉義街の中学校移転を目指す運動を事例研究として検討している。対象地域は、いずれも南部台湾に位置しているが、清朝統治末期に台湾島の政治的・経済的中心が北部に移る以前に繁栄を経験した地域もあれば、五州二庁制の導入で新たに州の中心という立場を獲得した地域もあって、その背景は一様ではない。とはいえ、南部台湾は旧都の台南を含め、全体として北部台湾の後塵を拝していたと言え、南部の視点にもとづく本書の歴史叙述は、日本統治期の台湾に対するわれわれの理解をより豊かなものとするだろう。

誘致の成功が経済的メリットをもたらす中等・高等教育機関は、同時にその地域に「文化度」の向上をもたらし、「格」を高める存在でもあった。誘致に奔走する地域の「有志」は、日本人と台湾人が混在する集合体だが、構成する人々の職業は多様で、異なる思惑を持って運動にかかわっていた。1940年代に中学校に入学した台湾人生徒の印象的な回想に始まる本書は、硬派な学術書ながら読みやすい筆致で、中等・高等教育機関の誘致にかかわった人々の「欲望」「本音」を巧みに描き出す。学歴社会の成立を論じた補論、コラムもおもしろい。

『わが町にも学校を』
植民地台湾の学校誘致運動と地域社会

藤井康子

九州大学出版会　2018年　￥5,950
ISBN：9784798502397

『戦後台湾教育とナショナル・アイデンティティ』

山﨑直也

東信堂　2009年　￥4,400
ISBN：9784887138902

個人を国家共同体の成員として政治的・文化的に社会化することは、近代学校教育の主要な目的のひとつである。戦後台湾の教育には、この個人の「国民化」が極めて端的に現れている。中華民国を中国全土の唯一正統な国家とする国是にもとづく従来の「中国」化教育から、最近の台湾の主体性を顕著に示す「本土化」教育まで、歴史の変遷を反映した戦後台湾教育を、公民教育を中心に精細に分析・考察、近代教育の一特性を明らかにする。

『市民がつくる社会の学び』

台湾「社区大学」の展開と特質

山口香苗

大学教育出版　2020年　￥2,750
ISBN：9784866920917

民主社会の建設を目指す台湾は、1990年代後半、市民の学びの拠点として「社区大学」を全土に設置した。「社区大学」ではどのような理念を掲げられ、どのような学びが展開されているのか。実践の特徴を明らかにし、台湾での市民の学びを通じた社会形成のあり方を考える。

『台湾文学と文学キャンプ』

読者と作家のインタラクティブな創造空間

赤松美和子

東方書店　2012年　￥3,520
ISBN：9784497212245

反共教育の一環として始まった文学キャンプが、民主化の進む今日まで続いているのはなぜか。作家、文芸編集者、読者ら文学愛好者が一堂に会するこの一種独特な文学活動を、関係者200名を取材し、実際に文学キャンプにも参加した著者が分析。現代台湾文学の一側面を論述する。日本における台湾文学出版目録も収録。

『東アジアの刑事司法、法教育、法意識』

映画『それでもボクはやってない』海を渡る

阿古智子、石塚 迅、山﨑直也・編

現代人文社　2019年　￥2,420
ISBN：9784877987411

「人権」や「法」といった市民社会を支える事柄について、東アジアの若者はどのように考えるのか。日本の刑事裁判が抱える問題をあぶりだした映画『それでもボクはやってない』をテーマに、日本、中国、台湾、香港の学生がディスカッションするワークショップを各国で実施。その成果を検証したシンポジウムを書籍化。共通する感想もあれば異なる感想もある中で、日本の刑事司法の課題が浮き彫りになる。

『変容する世界と日本のオルタナティブ教育』

生を優先する多様性の方へ

永田佳之・編

世織書房　2019年　￥6,380
ISBN：9784866860091

教育のゆらぎはつねに制度改革をもたらし、その動向はとくにヨーロッパや北米各国に見られるが、アジアにおいても顕著である。2016年12月に教育機会確保法（略称）を成立させた日本も例外ではない。世界13カ国におけるオルタナティブ教育の現状と問題点を整理し、その可能性を追究した本書では、台湾の先進的なオルタナティブ教育を、その原点から詳細に論じている。

『ロケーションとしての留学』

台湾人留学生の批判的エスノグラフィー

塩入すみ

生活書院　2019年　￥3,080
ISBN：9784865000917

自己を定義し定義され続け、他者との間に存在する差異に気づき意識するものとしての「留学」。台湾と日本との「旅」＝移動の中から、歴史的に近代化及び国家の政策の重要な一部を担い、一方、近年の日本では就労との境界が急速に曖昧になりつつある留学の意味を問い直す。

『戦時下台湾の少年少女』

白柳弘幸

風響社　2022年　￥880
ISBN：9784894893191

植民地時代、台湾は3つの集団で構成され、教育制度も分かれていた。本書は、3系統の学校生活・教師の姿・行事などを体験者から聞き取った「オーラルヒストリー」であり、生き生きとした語りから当時の実態が浮かび上がる。

『日本統治下台湾の「国語」普及運動』

国語講習所の成立とその影響

藤森智子

慶應義塾大学出版会　2016年　￥7,700
ISBN：9784766423068

台湾総督府による日本語教育は、1930年代以降、台湾各地に設けられた「国語講習所」によって飛躍的に普及した。総督府が目指したのは皇民化政策にともなう「日本人への同化」であったが、実際には「国語講習所」に通うことは台湾人にとって「社会教育」の実利をも目的としたものでもあった。日本の「国語」普及政策とその実態を文献調査とフィールドワークから明らかにしつつ、その意味を読み解く。

『日本統治下　台湾の「皇民化」教育』

私は十五歳で「学徒兵」となった

林 景明

高文研　1997年　￥1,980
ISBN：9784874981962

日中全面戦争開始の前年に公学校（小学校）に入り、太平洋戦争開始の翌年に中学へ入学。国語（日本語）常用運動の模範「国語家庭」に育ち、「改姓名」を強いられ、ついには中学3年終了と同時に「学徒兵」として日本陸軍に召集された体験をもとに、日本統治下「皇民化」教育の実態を生々しく伝える。

『日本統治下の教科書と台湾の子どもたち』

陳 虹彣

風響社　2019年　￥880
ISBN：9784894894105

「同化」を基本とした日本の植民地教育。中でも「言葉」からの同化、すなわち国語（日本語）教育はその中核であった。本書は当時の国語教科書を文字と挿絵から丹念に読み解き、その背景にあった政策の意図やその変遷、さらに描かれた内容から、当時の人々の暮らしまで分析。日本と台湾の近代を浮き彫りにする1冊。

『台湾の日本語教科書と中国語会話書の研究』

昭和20年まで

園田博文

武蔵野書院　2021年　￥11,000
ISBN：9784838607426

日本統治下の台湾における日本語教科書と台湾語及び中国語（北京官話と諸方言）の会話書を分析。第1部では台湾における日本語教科書と日本語資料、第2部では日清韓会話書・台湾語会話書の成立と中国語方言会話書への展開、第3部では中国語会話書（北京官話会話書）の成立と展開を論じている。

『返校　影集小説』

李 則攸、巫 尚益／公共電視・監修／七海有紀・訳

角川ホラー文庫　2021年　￥770
ISBN：9784041114261

台北から金鸞に引っ越してきた劉芸香。転校先は時代錯誤の校則がいまなお続いている翠華高校だった。ある日、立ち入り禁止の涵翠樓で自殺現場を目撃してしまったことから、芸香の運命が変わっていく――。世界を魅了した台湾発のホラーゲーム『返校』の30年後の世界を描いた、戦慄の台湾ホラー小説。人々の思想を支配した民主化前の学校の緊張感が生々しく伝わる。

学
COLUMN 1

あなたを台湾に導く フレンドリーな伴走者

―人生を彩る出会いに「花束」を―

胎中千鶴

「出会い」というのは人生を彩る大切な出来事だ。出会った人に影響を受けたり支えられたりしながら私たちは生きている。それは相手が本でも同じだろう。たとえば、ある未知の領域や世界に惹かれ「もっと知りたい」と思ったら、その探検に同行してくれる経験豊富なガイド役、つまり安心して頼れる入門書や概説書と出会いたいと思う。

筆者が侯孝賢監督の映画に衝撃を受け、「台湾をイチから学ぼう」と決意したのは1990年代初頭。早速書店に行って自分のガイド役を探したが、当時は台湾関係の一般書はほんの数種類しかなく、あとは観光ガイドブックだけ。途方に暮れたのを覚えている。

その頃と比べると、現在の書店には「台湾本」があふれている。それはいまや台湾が、日本にとって身近な観光地やビジネスパートナーであるだけでなく、災害支援など困ったときにはお互い手を差し伸べるような近しい存在になったことの証しだろう。

それならガイド役と出会うのも簡単かといえば、これが案外難しい。入門書や概説書なのだから、必要な事項が正確に書かれているのはあたりまえ。できたらそれに加えて、探検の伴走者としてもふさわしい本を選びたい。書き手が「台湾を知って欲しい」という熱い気持ちを持ち、読み手を優しく迎え入れ、対話しながらいっしょに歩いていけるような本だ。そこでここでは、数ある台湾本の中から、「フレンドリーな伴走者」候補をいくつかご紹介しよう。

あなたが台湾という世界のドアをノックするとき、最初に出会って欲しいのは赤松美和子・若松大祐編著『台湾を知るための72章』（明石書店、2022年）だ。1990年代以降、日本の台湾研究は順調に深化したものの、最新の成果が一般書として社会に還元される機会は2000年代に入っても依然として少なかった。これに危機感を抱いた若手研究者が中心となって刊行したのが本書の旧版『台湾を知るための60章』（明石書店、2016年）である。「72章」は「60章」の高評価を受け、さらにバージョンアップした改訂版。総勢42名の気鋭の執筆者たちが、歴史・政治・経済・社会・文化・対外関係など項目別に章を立て、わかりやすく解説している。興味のあるテーマから目を通してもいいし、小事典のように手元に置いておくのもおすすめだ。筆者が台湾史の授業で受講生に最初に紹介する本でもある。

近年、日本の高校生が修学旅行で台湾に行く機会が増えている。拙著『あなたとともに知る台湾　近現代の歴史と社会』（清水書院、2019年）は、そうした高校生の読者を想定し、平易な文章で台湾の近現代史をひも解く。2022年から高校の必修科目としてスタートした「歴史総合」の学びにも役立てるように章立てや構成も工夫した。大学生にもぜひ手に取ってもらいたい。

ノックした扉が開き、いよいよ台湾という世界に足を踏み入れるときが来たら、研究者がひとりで書いた通史を読んで全体像をつかんでみよう。気軽にページをめくれる新書から2冊。まずは伊藤潔『台湾　四百年の歴史と展望』（中公新書、1993年）を推したい。本書は刊行後29年を過ぎてもいまだに書店に並ぶロングセラーだ。台湾が世界史に登場した16世紀から1990年代前半までの史実を丹念に網羅しており、バランスのとれた通史として読み進めることができる。著者の伊藤氏は1937年台湾生まれ。戦後の国民党一党支配の時代に学校で「中華民国の歴史」を学んだ世代だ。日本に留学して初めて「台湾の歴史」に触れた彼にとって、研究者としてこの本を世に出すことは「望外の喜び」だったという。'90年代初頭に急展開を迎えた民主化の過程をリアルタイムで追いつつ書かれた終盤部分は、そうした著者の心情が行間から読み取れて胸が熱くなる。

大東和重『台湾の歴史と文化　六つの時代が織りなす「美麗島」』（中公新書、2020年）は、待望久しい新書版の概説書である。著者は文学研究者。かつて長期滞在した南部の都市台南に軸足を置き、日本統治期から戦後にかけて活動した日台の民族学者や文学者の足跡をたどりつつ、各地の歴史や文化を丁寧に見ていく。「本書という伝声管を通して、台湾に住む、あるいはかつて住んだ人々の声を届け、いくつかの理解の入口を提供してみる」との著者の言葉どおり、読者は地層のように折り重なる歴史や文化をページごとにたぐりながら、その時代に生きた人々の姿や声を想像し、立体的に受け止めることができる。読了後も「この場所に立ち、歴史の声をもっと聴きたい」と思わせるような、静かな余韻が残る1冊である。

さて、伴走者とともに歩を進める知の探検もいよいよ佳境だ。このあたりで目を転じ、現地社会の側から考えてみたい。1980年代後半以降、台湾では民主化の進展にともない、それまでタブーだった台湾史研究に多くの研究者がかかわるようになり、ひとつの学術分野として存在感を増していった。その成果は、薛化元・主編、永山英樹・訳『詳説　台湾の歴史　台湾高校歴史教科書』（雄山閣、2020年）にも反映されている。本書は、台湾の高校で使用されていた歴史教科書『普通高級中学歴史第一冊』（三民書局、2018年）の日本語版。「教科書」と聞くと敬遠しがちだが、本書はカラーの図表や写真が満載で、コラムやクイズ形式の問いも充実、読み物として十分におもしろい。現地高校生になったつもりで、旧石器時代から現在までの歴史を学んでみよう。日本社会には、日本人が深くかかわった時代の台湾ばかりに目が行く傾向があるが、そんな「認知の歪み」を相対化してくれる本でもある。

ここまで、入門書や概説書を伴走者として探検してきた。知れば知るほど魅力的で味わい深いこの世界、こうなったらもう少し研究者目線でディープに掘り下げてみようか……と思う方もいるのでは。そんな方には少し歯ごたえのある1冊を紹介したい。

若林正丈・家永真幸編『台湾研究入門』（東京大学出版会、2020年）は、書名のとおり「台湾研究」のための入門書。東京大学で長く教鞭をとった台湾研究の第一人者、若林正丈氏を中心に、日台の研究者27名が台湾理解のためのキーワードを提示し、学術的な視点で解説している。本書の「はじめに」によると、それぞれのキーワードは「複雑に絡み合ったコンテキストの中の一束」であり、その一束は別の執筆者の一束と連動して「台湾とは何か」という問いかけにつながっていくという。まさに本書は、近年の研究成果をリボンで結び、読者に差し出された「花束」であり、両地の研究者が重ねてきた学術交流の結晶とも言えるだろう。

では、この花束は未来の日本や台湾にとってどんな意味を持つのだろうか。東アジアを取り巻く国際情勢が刻々と変化する今だからこそ、理性に裏づけされたこれらの豊かな学知は重要な使命を果たす。なぜなら知の力は、両者の親しい関係性を揺るぎないものにするために不可欠な「心棒」となりうるからだ。

ところで、あなたが次に台湾に行くのはいつだろう。入門書との出会いも大切だが、私がいちばん願うのは台湾そのものとあなたの幸福な出会いだ。かの地はいつもフレンドリー、みんな両手を広げて待っている。まずは最高の魯肉飯（ルーロウファン）を求めて訪ね歩く、なんていうのはいかが。道に迷ってもきっと誰かが助けてくれる。さあ本はリュックにしまって、旅に出よう。

『台湾を知るための 72 章』
【第 2 版】
赤松美和子、若松大祐・編著
明石書店　2022年　￥2,200　ISBN：9784750353777
中華民国と台湾との絡まる現状維持、五権分立の中華民国の主権と統治権、COVID-19で世界に名を馳せた「新台湾医学」、日本との関係……。台湾に関する基本的な知識を提供するとともに、政治と経済、社会、文化と芸術、対外関係などの最新情報を盛り込んだ台湾入門書。

『あなたとともに知る台湾』
近現代の歴史と社会
胎中千鶴
清水書院　2019年　￥1,100　ISBN：9784389500924
台湾と日本は苦難の歴史があったにもかかわらず、現在は「友だち」と言えるほど親密な関係を築いている。「ふたり」が今後もともに歩んでいくためには何が必要か。「ふたり」の出会いや歴史と向き合い、「友だち」がどんな未来をつくろうとしているのかを考える。

『台湾』
四百年の歴史と展望
伊藤 潔
中公新書　1993年　￥880　ISBN：9784121011442
大航海時代のオランダ支配に始まり、鄭氏政権、清国、日本、国民党政権と、今日までの台湾の歴史は外来政権による抑圧と住民の抵抗の記録である。では、近年の経済発展の要因はどこにあったか。急速な民主化は台湾をどう変貌させるのか。歴史を描き、将来を展望する。

『台湾の歴史と文化』
六つの時代が織りなす「美麗島」
大東和重
中公新書　2020年　￥990　ISBN：9784121025814
「美麗島」と称される台湾にいまも息づく独自の文化。その伝統は、1624年のオランダ統治以来、鄭氏、清朝、日本、国民党にいたるまで、各時代の外来政権との関係によって形づくられてきた。本書では、400年におよぶ歴史が織りなす文化の多様な魅力をひも解く。

『詳説　台湾の歴史』
台湾高校歴史教科書
薛 化元・主編／永山英樹・訳
雄山閣　2020年　￥2,750　ISBN：9784639026396
台湾の多くの高校で採用された歴史教科書『普通高級中学「歴史」』の初めての日本語訳。石器時代から始まり、多くの民族が存在していたこと、オランダ、スペイン、清、日本の統治時代、現代の経済発展と文化の発展まで、「台湾史」を凝縮した1冊。

『台湾研究入門』
若林正丈、家永真幸・編
東京大学出版会　2020年　￥4,290　ISBN：9784130362771
東アジアの地政学上、いまや重要な島となってきた台湾。台湾研究の第一線の研究者たちが、台湾の歴史・政治・社会・文化を理解するうえで重要なキーワードによってわかりやすく、簡潔に解説する。「台湾とは何か」という問いに多角的な視点から迫る新しい入門書。

胎中千鶴
たいなか・ちづる
目白大学外国語学部教授

高校教員や日本語教師を経て現職。専門分野は日本統治期（1895～1945）の台湾史。1990年代初頭、東京のミニシアターで侯孝賢監督の台湾映画『童年往事』と『悲情城市』を観て、台湾の重層的な歴史と深くかかわるストーリーに魅了された。「もっと台湾を知りたい！」。まるで雷に打たれたような強い気持ちに駆られ、32歳で大学の学士入学を決心。立教大学文学部の蔵国煇先生のもとで台湾史をイチから学ぶことになった。あれから30年あまり。近づいたり遠のいたりを繰り返しながら、台湾とのおつきあいは細く長く続いている。大相撲ファンなので、近年は戦前の大相撲の植民地興行や皇軍慰問の歴史についても関心がある。

主な著書
- 『あなたとともに知る台湾――近現代の歴史と社会』清水書院、2019年
- 『叱られ、愛され、大相撲！　「国技」と「興行」の一〇〇年史』講談社選書メチエ、2019年

台湾言語学

台湾語と台湾華語はどう違う？

— 案内人 —
吉田真悟

近所の書店の語学コーナーにある書棚の一角には、「台湾語」という区画が設けられている。しかし並べられている本をよく見ると、書名には「台湾語」を冠するものと、「台湾華語」と書かれたものの2種類があることに気づく。このふたつの用語は実際には別々の言語を指しているのだが、日本ではしばしば混同されがちであり、最近になってこの「台湾華語」という用語が広まるまでは、「台湾語」と銘打ちながら実際に扱う内容は台湾華語が中心、といった書籍も多かった。

ひと言で言うならば、台湾語は「台湾の閩南（びんなん）語（福建語）」、台湾華語は「台湾の標準中国語（北京語）」のことを指している。言語学の系統分類ではどちらも漢語（より専門的にはシナ・チベット語族シナ語派）に属しており、元々は中国大陸で漢民族が話していた言語であるという点は共通している。その意味では同じ言語の方言のような関係と言えなくもないが、漢語における各「方言」ごとの違いは日本語と比べてはるかに大きいため、互いにまったく通じないことが多い。なのでイメージとしては、元々ひとつの言語であったものが分岐した英語、オランダ語、ドイツ語など（これらを言語学ではインド・ヨーロッパ語族ゲルマン語派と呼ぶ）の違いに近く、そう考えるともはやそれぞれ別個の言語である。例として、「（あなたは）どこに遊びに行きたいですか？」という意味の文を、台湾語と台湾華語で言うとそれぞれ以下のようになる。

台湾語　：你beh去佗位迫迫？
（Lí beh khì tó-ūi tshit-thô?）
台湾華語：你要去哪裡玩？（Nǐ yào qù nǎlǐ wán?）

大陸から台湾に移住した漢族の中で、もっとも多かったのが対岸の福建省南部の出身者であり、彼らが話していたのが閩南語（「閩」は福建の別名）であった。閩南語は広東語や上海語とともに漢語の南方方言と呼ばれ、北京語などの北方方言と比べると、古い漢語の特徴を多く留めている。たとえば、音節末尾に現れる-p、-t、-kなどの子音は北京語ではすでに失われているが、閩南語には残っている（例：「北」北京語→běi、閩南語→pak）。また北京語の声調は4種類だが、閩南語には7種類あり、しかもそれらが規則的に交替する現象（変調）が特徴のひとつである。

閩南語は、アモイ（厦門）を中心とした福建省南部で現在でも話されているほかに、そこから漢族が移住した台湾、そして東南アジアなどでも使用されており、台湾語はその中の一種ということになる。そのほかの地域の閩南語とも意思疎通は可能だが、台湾語独自の特徴もある。たとえば語彙に関しては、台湾で接触したほかの言語からの借用語が挙げられ、台湾原住民の言語（オーストロネシア語族、マレー語やハワイ語などの仲間）や、日本統治時代に流入した日本語に由来する単語がある。とくに日本語からの借用語は、「注射（tsù-siā）」（注射）や「o͘-tó͘-bái」（オートバイ）など、近代的な事物を表す言葉を中心に数多く存在する。

台湾語は、台湾の7割強の人々が母語としていると従来言われており、最多数派であることから、現地では日常的に「台語」や「台灣話」、日本では「台湾語」と呼び習わされている。ただし、台湾にはほかにも客家語（台湾語と同じく漢語系）や原住民諸語を母語とする人々もいるため、「閩南語」や「台湾閩南語」と呼ばれることもある。

これに対して、中国のさまざまな方言・言語間の共通語として制定されたのが標準中国語であり、日本の標準語が東京方言を基礎としているように、標準中国語は北京語をもとにしてつくられている。台湾にもたらされた歴史は閩南語よりずっと新しく戦後になってからで、それ以前の台湾で標準中国語を話せたのは、ごく限られた人のみであった。日本の敗戦に伴い台湾は中華民国に接収され、数年後には大陸で国民党が共産党との内戦に敗れて、中華民国そのものが台湾に移転したことで、標準中国語は台湾で「国語」として普及していくことになったのである。

吉田真悟　よしだしんご
一橋大学大学院言語社会研究科専任講師

海運会社を退職して大学院に進学、上智大学等非常勤講師を経て現職。専門は社会言語学と台湾語で、主に台湾語の言語復興と文字使用について研究している。好きな台湾の歌手はロックバンドの五月天（メイデイテン）（Mayday）。お気に入りのアルバム「知足（チーズー）」は、中国語曲による Disc1 と台湾語曲による Disc2 の2枚組で、台湾の多言語環境を感じさせてくれる。中でもイチ推しは、Disc2 に収録されている「麥來亂（マイライルン）」。失恋後の繊細な感情を逆に力強い台湾語で歌い上げており、心に響く1曲である。台湾のカラオケでこうした曲を大声で歌い、現地の人達といっしょに盛り上がることのできる日が、一日も早く戻って来ますように。

主な著書・訳書

- 『台湾語で歌え日本の歌』共訳、国書刊行会、2019年
- 『台湾華語（世界の言語シリーズ18）』共著、大阪大学出版会、2022年

標準中国語は、現在の中国では「普通话」と呼ばれる一方、台湾では「國語」または「華語」と呼ばれているが、基本的には同一の言語で意思疎通には問題がない。ただし、戦後別々の道を歩んできた結果として異なる特徴が生じてきており、台湾華語とはこの「台湾における標準中国語」を指しているのである。もっとも大きな違いは漢字の字体とその発音記号であり、中国では簡略化された「簡体字」とローマ字による「漢語拼音（ピンイン）」を使用するのに対して、台湾ではいまでも「繁体字」（日本で言う旧字体）と独自の記号である「注音符号」を用いている（例：「広」中国→广／guǎng、台湾→廣／ㄍㄨㄤˇ）。

また、表記以外に発音や単語、さらには一部の文法についても違いが見られる。その中には、標準語が大陸と台湾それぞれで制定・整備される過程において生じたものもあれば、台湾で実際に使用される中で土着の言語、とくに台湾語の影響を受けて生まれたものもある。たとえば、反り舌音が稀薄であることや、状態の確認やすでに起こった動作を表す「有」の用法（例：「你有去過嗎？（あなたは行ったことがありますか？）」）など、中国語で本来非標準的とされる特徴が台湾では一般的に聞かれるが、それらの多くは台湾語の発音や文法に由来している。こうした違いは、アメリカ英語とイギリス英語の関係のようなもの、と言うとわかりやすいかもしれない。

さて、そんな台湾語と台湾華語はどちらも台湾で広く使われている言語なのだが、台湾人はそれらをどのように使い分けているのだろうか？　もっとも簡単かつよくなされる説明は、台湾語は家族や友人といった親しい人同士の私的な場面、台湾華語は学校の授業や職場の会議といった公の場で使用される、というものである。また、書き言葉は基本的に台湾華語であり、台湾語が使われるのは話し言葉が中心である。この点に関しては、日本における方言と標準語の関係を思い浮かべるとイメージしやすいが、じつはそうした言語間の棲み分けは徐々に崩れてきている。

戦後台湾に中国語がもたらされると、日本語に代わる国語として普及が推し進められ、とくに1980年代までは、学校で中国語以外の言語が禁止され、テレビでの使用に制限がかかるなど、ほかの言語を抑圧する厳しい政策が取られていた。結果として、台湾華語は現在台湾において100%に近い普及率を達成しているが、それにともなって私的な場面でも台湾華語の使用が拡がりつつあり、台湾語などその他の言語の衰退という副作用を引き起こしているのである。

民主化後は逆に、それらの言語を復興しようという試みが始まっている。たとえば、それまで文字で書かれることの少なかった台湾語に正書法を定めようという運動が起こり、学校教育にも台湾語、客家語、原住民諸語などの授業が導入された。社会のさまざまな面で多様性を重んじる傾向にある現在の台湾が、今後どのような多言語社会を築いていくのか、その点では後塵を拝しているように思える日本にとっても、学ぶべき点が多いのではないだろうか。

とはいえ現実の台湾に目を向けると、多くの社会活動はいまなお台湾華語を中心に回っていて、とくにわれわれ外国人の耳目に触れる言葉は、圧倒的に台湾華語が多い。実際に台湾人の中でも、若い世代を中心に台湾語が話せない人は増えてきており、（いまはなかなか難しいけれども）台湾へ旅行に行きたい、あるいは台湾人と交流したいという人々にとって、もっとも需要がある言語は台湾華語であろう。しかし多くの台湾人にとって、台湾語は故郷（ふるさと）の思い出や、中国とは異なる「台湾人」としてのアイデンティティといった、特別な意味を持つ言語であることもまた確かである。なので台湾を理解したいと思う方には、ぜひとも両方を学んでみていただきたい。

『今日からはじめる台湾華語　CD付』

樂 大維

白水社　2017年　¥2,860
ISBN：9784560087343

本書は、台湾華語を学びたい人のための入門書である。これまで台湾華語を習得する人は、まず日本の大学などで中国の標準中国語（普通話）を学び、その後台湾へ行くなどの経験を通じて、台湾で話されている中国語との違いに気づき、自ら修正していくというルートをたどる場合が多かった（筆者もそのひとり）。最近では初歩の段階から台湾の中国語を学べる学習書が登場してきており、この本もその中のひとつである。

ほかの台湾華語入門書と比較すると、本書の特徴は表紙にも書かれている「イチから台湾式に」学ぶ、という方針が徹底されている点にある。中国と台湾の中国語の、文字どおりもっとも「目につく」違いはその表記であり、「台湾華語」を冠する書籍は例外なく、漢字表記に簡体字ではなく繁体字を採用している。一方で発音表記に関しては、台湾華語の学習書でも漢語拼音を主に用いているものが多い。これは、台湾の注音符号がローマ字の拼音と比べて取っつきにくいというのが最大の理由だろう。しかし本書は、発音表記も注音符号を主としているので、それも含めて台湾式に学んでみたい人にとって、貴重な存在である（会話本文には拼音も併記されるが、注音が漢字の直下に書かれているのに対して、拼音は見開きの隣ページに配されている）。

注音符号は台湾で通称「ㄅㄆㄇㄈ（ボポモフォ）」と呼ばれ（仮名を「あいうえお」と呼ぶのと似た感じ）、初等教育で漢字を学習する際などに日本語の「振り仮名」のように使われるほかに、台湾のパソコンや携帯電話で漢字を打つ場合も、注音入力が主流である。最近はこうした機器にも拼音入力への変換機能がついているため、外国人が台湾で生活するに当たってこの記号を避けて通ることもできなくはない。しかし、世界中で現在台湾だけが使用している注音符号は、近年台湾人にとってアイデンティティの拠り所となる風潮も見られ、台湾を理解するためには、習得しておいて損はないと思われる。

世界の言語シリーズ18
『台湾華語』

林 初梅、吉田真悟

大阪大学出版会　2022年　¥2,860
ISBN：9784872593433

まずは、このような場で自著を紹介する身勝手をおゆるしいただきたい。本書は台湾華語の中・上級教科書である。いささか言い訳めくけれども、台湾華語の入門・初級向け学習書は近年にわかに増えてきているが、中・上級向けのものはまだ非常に少なく、この本を執筆し、ここで紹介する背景にはそうした現状がある。

本書は台湾華語で書かれた30篇の文章から成っており、単語や文法の解説も含まれるが、文章の内容に関連づけて学生の思考や議論をうながすことにも重点を置いている。いわば、台湾華語「を」学ぶだけでなく、台湾華語「で」学ぶ教科書でもある。それでは台湾華語で何を学ぶのかと言うと、それは「多言語社会台湾」である。本文の内容は、言語社会学／社会言語学を専門とするふたりの著者の研究や経験にもとづいており、台湾の歴史やアイデンティティ、客家や原住民の言語、台湾華語の特徴、台湾語の使われ方、台湾と日本語の関係などなど、どれも台湾の多様な言語及び言語状況に関するものである。その意味で、本書はあくまで台湾華語の教科書ではあるが、「台湾は台湾華語だけではないよ！」というのがメッセージのひとつでもあって、台湾華語という鍵を使い、扉の先に広がる多言語の世界を垣間見てほしいという願いを込めて執筆した。

また、ここからは私個人の思いになるが、そうして学んだ多言語社会としての台湾を他人事（ひとごと）としてとらえるのではなく、自国や自分自身のことを省みるきっかけにしてほしいとも願っている。多くの読者にとって引き比べる対象は日本だと思うが、台湾は多言語社会で日本は単一言語社会である、という言い方は正しくない。本文中に台湾の原住民と日本のアイヌを比較する叙述が出てくるが、身近にある多言語・多文化を普段見過ごしてはいないか、そんなことについて考える、つまり台湾「を」学ぶと同時に、台湾「から」学ぶ教科書に本書がなってくれたら、著者のひとりとしてこれに勝る喜びはない。

前ページでは台湾華語に関する書籍を紹介したが、本ページでは台湾語の学習書を紹介したい。1冊目に挙げる本書は、白水社の語学書「エクスプレス」シリーズのひとつである。このシリーズは、少数言語や古典言語を含む幅広い言語をカバーした、マイナー言語学習者の強い味方であり、20課で発音、会話、文法と基礎的な内容をひととおり学べるように構成されている。過不足のない、もっともオーソドックスな教材としておすすめである。

台湾語の表記についてはローマ字、漢字、仮名を併記しており、これも日本の台湾語教材では一般的な形式と言えるが、本書は仮名表記に総督府式（日本統治時代に台湾総督府が考案した表記法）の簡略版を採用しているのが特徴である。総督府式は単に近い音を仮名で写したものではなく、しっかりとした音韻分析にもとづく完成された表記体系であり、言語学的には興味深いものだが、そのぶん日本語の仮名とは発音の乖離が大きいことから、初学者が大まかな発音をつかむ手がかりとしては不向きであろうと思われる。

またローマ字表記と漢字表記について、以前は台湾でも書き方が統一されておらず、人によってバラバラな状況であったため、本書はその中で、ローマ字についてはもっとも伝統的な「教会ローマ字」と呼ばれる表記法を採用し、漢字については著者の判断によって選ばれた字を用いている。しかし2000年代以降、台湾の教育部（文部省に相当）が「台湾閩南語羅馬字拼音方案」（「台羅拼音」と略称）というローマ字表記の規範を発表し、また『台湾閩南語常用詞辞典』という辞書をウェブ上で公開したことで、漢字表記についても公的な目安が示されている。台湾ではこうした新たな文字規範が徐々に普及しつつあるが、残念ながら日本ではまだこれらに準拠した学習書は見当たらないので、今後の登場が待たれるところである。

『ニューエクスプレスプラス　台湾語』
CD＋音声アプリ

村上嘉英

白水社　2019年　¥2,860
ISBN：9784560088395

本書も台湾語の学習書であるが、上で述べた「エクスプレス」とは異なり、場面・ジャンル別の単語・フレーズ集である。「文法編」に基本的な構文も網羅されているものの、基礎から体系的に学ぶというよりは、必要に応じて参照したり、パラパラとめくって楽しみながら読んだりするのに適している（また発音の解説は少ないので、付属のCDに頼るしかない）。

台湾語の表記は教会ローマ字、漢字ローマ字交じり、仮名の併記式である。この「漢字ローマ字交じり」という形式は、実際に台湾で台湾語による文学作品を創作している作家の間でよく用いられている書き方であり、台湾語復興運動を牽引している陳豐惠氏の、監修者としてのこだわりが感じられる。またそれとも関連して、実際の会話でよく使われる自然な単語やフレーズが多く掲載されている点も、本書の魅力のひとつである。

そしてもうひとつ重要な点は、同じ内容が見開きの左ページに台湾語、右ページに北京語（台湾華語）と2言語で書かれていることであり、この構成もある意味で実用性重視の表れと言える。なぜならば、台湾語は台湾で広く使われている言語であるものの、使用される場面には社会的に一定の限りがあるからである。たとえば通常語学書の第1課は、初対面の人への自己紹介から始まるのが定石であるが、実際にそのような場面において外国人が台湾語で話すことを、多くの台湾人は想定していないだろう。

これは学習者にとって（また研究者にとっても）切ないことではあるが、台湾語の使い所が限られるという現実に鑑みれば、同じことを台湾華語ではどう言えばよいかも教えてくれる本書は、大変頼りになる存在と言えるだろう。また、左右の台湾語と台湾華語を見比べてみると、それらが単純に同じ漢字の読み方だけを変えたような直訳ではなく、それぞれの言語で本当に自然な言い方が考え抜かれていることがわかり、執筆者の配慮と心意気に頭が下がる思いである。

CD BOOK
『絵でわかる台湾語会話』

趙 怡華／陳 豐惠・監修／たかおかおり・絵

明日香出版社　2006年　¥2,090
ISBN：9784756909916

『デイリー日本語・台湾華語・英語辞典』

樋口 靖・監修／三省堂編修所・編

三省堂　2018年　¥2,200
ISBN：9784385122892

シンプルで使いやすい３カ国語辞典の台湾華語（台湾で話されている中国語）版。日常的な基本語を約１万４千項目収録。台湾華語にはピンインとカナ発音つき、英語はカナ発音つき。日本語見出しはふりがなとローマ字つきで、外国人学習者にもおすすめ。付録に「日常会話」（音声ウェブサービスつき）と「分野別単語集」。旅行に、初歩の学習に最適。

『デイリー日本語・台湾華語・英語3か国語会話辞典』

李 麗秋、樋口 靖・監修／三省堂編修所・編

三省堂　2019年　¥1,430
ISBN：9784385122649

見やすく、使いやすい、３カ国語会話辞典の台湾華語版。初心者から使える日常会話1200例を収録。実際の場面を想定した会話例や、関連語、ミニ情報などコラムも充実。華語にはピンインとカナ発音つき。日華・華日単語帳、日本語キーワード索引、音声ウェブサービスつき。

『台湾華語単語はじめの1000』

林 虹瑛

アスク出版　2021年　¥2,200
ISBN：9784866393766

入門～初級レベルの台湾華語単語1000語を、台湾要素がたっぷりで実用的な例文とともに紹介する。すべての単語・例文に注音符号を併記。TOCFL Band A対策に最適、旅行会話ではもの足りない方、留学準備中の方におすすめの単語帳。台湾出身ナレーターによる音声のダウンロードサービスつき。

『台湾華語単語つぎへの1400』

林 虹瑛

アスク出版　2021年　¥2,860
ISBN：9784866394411

中級レベルの台湾華語単語1400語を、実用的な例文とともに掲載する。すべての単語・例文に注音符号を記載。TOCFL Band B1対策に最適、台湾への留学や移住を検討している方におすすめ。台湾出身ナレーターによる音声のダウンロードサービスつき。

『ゼロから1人で台湾華語』

CD付＆音声DL付

林 斯啓、欧米・アジア語学センター

あさ出版　2021年　¥2,420
ISBN：9784866673103

テレビ放送や、学校教育、日常生活など、あらゆる場面で公用語として使われる台湾華語。単語―つひとつに声調（音の上げ下げ）をつけ意味を持たせる（声調言語）台湾華語を、発音・文法・文型などさまざまな角度からわかりやすく徹底解説する。あいさつなどの慣用句も網羅。音声ダウンロードサービス、CDつき。

『もっと知りたい台湾華語』

CD付

張 佩茹

白水社　2021年　¥2,970
ISBN：9784560088968

発音と基本文型を学び終えた人のための学習書。基礎を復習しながら、アスペクト助詞、補語、特殊構文などの文法事項を学んでいく。普通話との違いについても丁寧に解説されており、暦に沿った会話文からは、台湾らしい季節のイベントや節句の風習も学べる。繁体字にはすべて注音符号を付し、会話文や新出語句にはピンインを併記。

『日常台湾華語会話フレーズ』

Best表現1100

樂 大維

明日香出版社　2021年　¥1,980
ISBN：9784756921857

短い・簡単・覚えやすい。台湾の人たちとの交流の場などですぐに使える、短くて簡単なフレーズ集。あいさつ、交流、食事、ショッピングなど、日常生活や旅行・留学などで使える基本フレーズが場面別にまとめられている。SNS関連の表現も紹介。音声のダウンロードサービスつき。

リアルな日常会話を楽しむ

『台湾華語60表現』

渡邉豊沢

三修社　2019年　¥2,420
ISBN：9784384047516

ネイティブとのコミュニケーションで使われる頻度の高い表現を選び出し、語句を入れ換えるだけで自在に使える会話パターンを紹介。例文のほとんどが８文字以内でマスターしやすく、観光会話・日常会話・単語集なども豊富に掲載する。また、全例文に注音符号とピンインを記載。付属のCDには日本語・台湾華語の順で主なフレーズが収録されている。

『台湾人が毎日必ず話す台湾華語180』

台灣人每天必說的180句

Lily Lin、高向敦子／九〇三・イラスト

三修社　2022年　¥2,420
ISBN：9784384050073

ある台湾人一家の日常を舞台に、家族や友人が毎日必ず口にする会話フレーズをイラストとともに紹介する。衣、食、住、行、育、楽。生活シーンは６つのカテゴリーに分類され、それぞれの場面で使える台湾華語が楽しく、無理なく、テンポよく学べる構成。会話文にはすべて注音符号とピンインを記載。コラム、索引、ダウンロード音声つき。

3パターンで決める

『日常台湾華語会話ネイティブ表現』

潘 凱翔

語研　2022年　¥2,420
ISBN：9784876153541

台湾華語のネイティブスピーカーが日常生活でよく使う表現や言い回しを、会話の状況や目的別に３パターンのダイアローグ（対話型の例文）で紹介。表現の幅を広げたい初級者～中級者から、中級以上の台湾華語学習者にも対応。無料ダウンロード音声つき。

『日本人が知りたい台湾人の当たり前』

台湾華語リーディング

二瓶里美、張 克柔

三修社　2020年　¥2,420
ISBN：9784384058956

「おじさんもタピオカを飲むの？」「民主化をどう確立していったの？」「台湾人ってなぜあんなに親切なの？」。歴史や社会・文化習慣など、台湾人の友人や先生に聞きたいけれどいまさら聞けない、台湾についての100の疑問を解消する。台湾人とのコミュニケーションですぐに役立つ会話例、関連するキーワードも掲載。台湾華語・日本語併記で、楽しみながら自然に台湾華語で読む力が身につけられる１冊。

『小飛さんの今日から話せる台湾華語！』

音声DL付

小飛

ベレ出版　2021年　¥1,980
ISBN：9784860646738

「こんにちは」「さようなら」「ありがとう」など基本的な挨拶をはじめ、台湾で訪ねたお店やレストラン、観光スポットで使える表現を収録。台湾華語初心者に向け、基本フレーズから重要構文、接続詞や副詞、場面別の対話型例文も解説する。台湾に着いたその日からすぐに使える表現が満載。無料ダウンロード音声つき。

『旅する台湾華語』
台灣好好玩！

簡 希蓁、高向敦子

IBCパブリッシング
2018年　¥2,420
ISBN：9784794605412

台湾までの飛行機内、宿泊先、観光スポット、買い物で訪ねるさまざまなお店――。台湾旅行を９つのシチュエーションに分け、それぞれのシーンで想定される台湾華語フレーズと単語を紹介する。台湾華語ネイティブによる発音が確認できるCDが付属。

『旅の台湾華語』
伝わる会話&フレーズブック

樂 大維

アスク出版　2019年　¥1,870
ISBN：9784866392707

台湾の街角で交わされる会話に耳を傾けて仕入れた、安心して台湾の旅を楽しめる現地密着型の23会話＋300フレーズを掲載。台湾の標準的な字体を使用し、注音記号・ピンインを併記して紹介する。単語リストを閲覧できる二次元バーコード、音声がダウンロードできるシリアルコードつき。

『台湾華語でぐるっと台湾めぐり』

樂 大維

白水社　2020年　¥2,420
ISBN：9784560088869

台湾全土を旅しながら台湾華語を学ぶ1冊。17都市で交わされる楽しい会話例を通して、台湾華語の単語や表現を学習していく。すべての会話文や補充単語に台湾華語の発音を表す注音符号とピンインを併記。巻末には注音符号音節表つき。音声の無料ダウンロードサービスつき。

『キクタントラベル台湾華語』

渡邉豊沢

アルク　2020年　¥1,980
ISBN：9784757436527

台湾華語の基礎からすぐに使えるフレーズまで、台湾旅行で必要になるであろう会話フレーズをなるべく短く、なるべく覚えやすく紹介する。会話文には注音符号に加え、ピンインも併記。リズムよく聞く・話す「キクタン」のメソッドで、発音も楽しく学べる。

ひとり歩きの会話集『台湾編』

JTBパブリッシング
2019年　¥1,430
ISBN：9784533122477

©JTBパブリッシング

「ひとり歩きの会話集」シリーズの台湾編。基本的な挨拶や言い回しなどの基本表現、旅行中のさまざまな場面で発生するフレーズを時系列に並べた場面別会話のほか、便利な日台／台日辞書も収録。音声データのダウンロードサービスつき。

『恋する台湾華語』
談談戀愛在台灣

高向敦子、許 玉穎

IBCパブリッシング
2020年　¥1,760
ISBN：9784794606211

台湾ドラマの傑作5作品から、とっておきの28シーンを採録。シーンの背景や会話文と和訳のほか、覚えておきたい語句、発音を示す注音符号、印象に残るフレーズなどを掲載する。恋人たちの会話から、生きた台湾華語を学ぶ1冊。

こんな本もございます 学 紀伊國屋書店

『旅するこどもの台湾華語』
台北編

コンデックス情報研究所・編著

成美堂出版　2020年　¥990
ISBN：9784415327846

小学４年生のミオと小学２年生のアキラが台北を旅する34のシーンごとに、台湾華語会話文をイラストとともに紹介する。和訳とカタカナの発音表記、関連する単語も掲載。親しみやすいイラストで日常表現・単語がムリなく学べ、カタカナをそのまま読めば発音もできる。子どもの海外への興味をどんどん広げる１冊。

筆談もOK！
『書き込み式　台湾華語＆繁体字練習帳』

樂 大維

アスク出版　2018年　¥1,430
ISBN：9784866390840

繁体字を書きながら台湾華語の基本を学ぶ、筆順つきの書き込み式練習帳。収録されているのは、超基本の繁体字およそ100字。日常的な単語と、日常会話の基本フレーズもなぞり書きしながら学習できる。注音符号、よみがな、ピンイン併記。練習するすべての漢字、および単語とフレーズの音声のダウンロードが可能。

『日本通の友達と台湾華語で知る大好きな台湾文化』

『ライブ互動日本語』編集部

三修社　2022年　¥2,420
ISBN：9784384060218

日本語学習者に支持されている台湾の日本語学習誌編集部が、台湾と日本の社会や文化の相違と関係をふまえ、年中行事に食文化、各地域文化に風習や民族などを解説。台湾華語ネイティブによる音声がダウンロード・ストリーミングできるシリアルコードつき。

『知られざる台湾語文学の足跡』

廖 瑞銘／酒井 亨・訳

国書刊行会　2020年　¥2,640
ISBN：9784336071569

台湾語は最大の母語人口を誇りながら、いち「方言」として扱われてきた。1980年代に台湾ナショナリズムの高まりから興った「母語復興運動」以降、自分たちの「言語」で、自分たちの「文学」を花開かせる、現在進行形の台湾語文学。その歴史をひも解く。

『台湾語で歌え日本の歌』

陳 明仁／酒井 亨・監訳

国書刊行会　2019年　¥3,080
ISBN：9784336064585

古くからの習俗が残る田園に、因習にしばられながらも永々たる時の流れを生きる明朗なる人々。少年時代の幸福な記憶と都会の外省人との軋轢、ときに二・二八事件など政治的モチーフが絡みあう、台湾語文学の旗手・陳明仁による傑作群。小説・詩、戯曲を収録するほか、解説なども掲載。北京語に依らない台湾語文学を本邦初紹介。